

日本語翻訳実習コースにおける社会貢献の試み：フォトボイス・プロジェクトを中心に
 IN DIALOGUE WITH PHOTOVOICE: CONTRIBUTING TO COMMUNITIES THROUGH
 PRACTICUM IN JAPANESE TRANSLATION

吉浜美恵子, ミシガン大学

Mieko Yoshihama, University of Michigan

望月良浩, ミシガン大学

Yoshihiro Mochizuki, University of Michigan

1. はじめに

近年、グローバル時代の日本語教育の目的として、「社会・コミュニティ参加をめざすことばの教育」（佐藤 2015）というものが唱えられている。つまり、学習者が積極的にコミュニティとつながり、社会に貢献していけるような教育が求められているのである。本学の日本語翻訳実習コースでは、東日本大震災の被災地で実施されている、フォトボイスと呼ばれるアクション・リサーチ・プロジェクトに協力することで、学習者のコミュニティ参加、社会貢献を実践している。

本翻訳コースの学習者たちは、フォトボイス・プロジェクトの「声」と呼ばれる短いテキストを日本語から英語に協働的に翻訳し、彼らの訳文は、インターネットや国連防災世界会議を含む展示会などを通じて、世界中に発信されてきた。このプロジェクトへの参加協力は 2013 年より行っているが、2015 年夏、初めての試みとして、被災地（全六都市）を訪れ、訳文を提供した学習者と原文を書いたフォトボイス・プロジェクトの参加者たちが対話する場を設けた。

本稿では、日本語翻訳実習コースの授業活動の中から、特にフォトボイスの日英翻訳と被災地へのフィールド・トリップに焦点を当て、日本語学習者が翻訳活動を通してどのように社会貢献を実践したか、そして、翻訳に必要な日本語能力がどの程度伸びたかについて考察する。また、その考察から、翻訳という授業活動が「社会・コミュニティ参加をめざすことばの教育」にいかに関与したものであるかについても述べたい。

2. フォトボイスとは

本稿の主題であるフォトボイス（PhotoVoice、以下、PV）というのは、その名が示す通り、写真（Photo）と撮影者の心情を綴った文章（声: Voice）を組み合わせた調査・表現方法である。1990 年代にアメリカの女性研究者が考案し、それ以来、様々な社会問題の提起や解決のための参加型プロジェクトとして、幅広い分野で用いられている。日本では、東日本大震災後に、本稿の著者の一人、ミシガン大学社会福祉学教授 吉浜美恵子のもとで始まり、震災にまつわる諸問題の解決のための道筋を考え、政策や支援などにつなげることを目指すアクション・リサーチとして実施されている。

この PV プロジェクトでは、「女性たちが見た、経験した大震災」をテーマに、被災した女性や支援に関わる女性たちが、地震や津波、原発事故に関する写真を撮影し、グループでの語り合いを通じて、「声」を作成する。この写真と「声」によって、プロジェクト参加者は、復興・支援にまつわる地域社会や社会全体の課題を可視化させ、社会に発信することができる。つまり、PV とは、被災した女性たちが、写真を撮り、語り合い、発信し、社会的な問題に対して共に動き出すという、極めて協働的なプロジェクトなのである（吉浜, 2012）。

この手法には、写真だけでは伝えられないこと、言葉だけでは伝えにくいことを伝えられるだけでなく、撮影者が自分たちをとりまく状況や心情といった個人的な経験を社会的に意味づけできるという利点がある。また、PV のミーティングは継続的に実施さ

れ、孤立緩和・グリーフ・ケアといった、被災した女性、支援に関する者への社会心理的支援という意味合いもある。

震災直後の2011年4月から準備を始め、同年に郡山、仙台、宮古、石巻の各地でミーティングを開催した。参加者は多様なバックグラウンドを持つ40以上の女性たちが大半で、これまでデジタルカメラで写真を撮った経験がほとんどなかった人も多かった。2014年からは、福島の子供たち、東京に避難している女性たちのグループもプロジェクトに加わった。

PVプロジェクトの主産物である写真と「声」は、NWEC災害復興女性支援アーカイブ (http://w-archive.nwec.jp/il/meta_pub/G0000337wd) や国立国会図書館ひなぎくNDL東日本大震災アーカイブ等を通じて、インターネット上で発信¹されている。また、57回国連女性の地位委員会サイドイベント（2013年3月）や内閣府男女共同参画会議監視専門調査会「防災・復興ワーキンググループ」による公開ヒアリング（2014年1月）、被災地である仙台で開催された、第3回国連防災世界会議（2015年3月）を含む、国内外の展示会・報告会等でも展示されてきた。展示された「声」には英訳と仏訳が添えられているが、それは、プロジェクト参加者たちのメッセージを世界中の多くの人たちに発信するためには、日本語という媒介言語だけでは不十分であったからである。このような経緯で、日本語翻訳実習コースの学習者たちは、「声」の英訳を提供するという形で、PVプロジェクトに協力することになった。

3. 社会・コミュニティ参加をめざす日本語教育

21世紀の日本語教育において、社会・コミュニティ参加をめざす日本語教育というのは、なぜ重要なのであろうか。佐藤・熊谷（2011）は、「学習者たちが日本語を学んでいる」根底には、「日本語を使って社会と関わるという目的がある」のではないかと述べ、社会・コミュニティ参加をめざす言語教育の意義を次のようにまとめている。

- 1) ことばを使って自分自身を表現するためには、自己に対峙する他者が必要なため、社会・コミュニティの存在を抜きにした言語使用は意味がない。
- 2) 自己実現を可能にするためには、それを実行する場、そしてそれを認めてもらう場、つまり、社会・コミュニティが必要である。

佐藤・熊谷は、「言語を学ぶ・使うということは、本質的に、社会的な営みである」ことを強調し、学習者というものを「知識の受け皿」としてではなく、社会（コミュニティ）の中で（中略）問題解決を図り、自己や他者を評価しながら変化していく存在として捉えている。そして、従来の日本語教育の現場では、「『その言語をつかって何がしたいのか』、『1人の日本語話者としてどんなことができるのか』といったことを学習者が模索できるような環境を作るということにはあまり注意が払われてこなかった」ことを問題視している。そこで、「言語や文化の知識・規範を学びながらも、（中略）積極的に社会に関わっていくことで、知識の創造に参加・貢献し、規範にも影響を与え変革していきることができるような柔軟性と創造性、そして、批判的な視野をもった学習者を育成していく」授業活動が、これからの日本語教育において重要になると主張している。

當作（2013）は、「今習っている外国語を使って、学校の外に出て、いろいろなコミュニティに参加する能力を身につける」ことが重要であると述べ、「実際のコミュニティに参加しながら外国語を覚えるソーシャルネットワークワーキングアプローチ」を提唱して

¹ PVの個々の写真と「声」、また、本コースの学習者が提供した英訳は、上記アーカイブから「フォトボイス」というキーワードで検索し、一覧を参照されたし。

いる。それを受け、澤・渡辺（2014）は「『分かる』『話せる』能力に加え、新たに『つながる』能力が外国語学習に必要な要素とされている」と述べ、「日本語母語話者との接触が少ない海外で日本語を学ぶ初級日本語学習者の社会的『つながり』」を目標としている。『外国語学習のめやす』（當作・中野, 2012）も、人間形成のための外国語教育を理念に、「3領域（言語・文化・グローバル社会）×3能力（わかる・できる・つながる）+3連繫（学習者・他教科・教室外）」、いわゆる「スリー・バイ・スリー・プラス・スリー」をキーコンセプトとして、総合的コミュニケーション能力の育成を学習目標に掲げている。

4. 日本語翻訳実習コース概要

日本語を使って社会参加を目指すということを念頭に置いた時、翻訳という手法は、そのゴールとかなり親和性が高いものであると言える。なぜなら、その訳文を必要としている誰かが存在しているという時点で、翻訳は必然的に社会・コミュニティへの貢献を視野にいたした活動だからである。例えば、大学で日本語を学ぶ学習者が、留学中や日系企業でのインターンシップ中に、e-mail やマニュアル、案内状といった、ちょっとした文章を翻訳して欲しいと頼まれることは多い。しかし、そのような翻訳への高い需要があるにもかかわらず、アメリカ国内の大学、特に学部レベルの日本語プログラムにおいて、実際に翻訳の技術を学ぶ機会は非常に少ないという報告がある（Hasegawa, 2005）。実際、本学でも、長期留学を終えた学生から、日本滞在中に翻訳技術の必要性を痛感したという声を聞くことが多かった。そのようなニーズに応えるため、本学では、実務翻訳に特化した日本語翻訳実習コース（ASIANLAN 441: Practicum in Japanese Translation）を2012年に開講した。

本コースは、内容重視の言語教育（content-based instruction）の理論に基づき、日本語という第二言語を通じて日英翻訳・英日翻訳の基本的なスキルを学ぶと同時に、実践的な翻訳作業を通じて翻訳に必要な日本語能力を身につけることを狙いとしている。授業活動を特色づける点は二点あり、第一に、ピア・ラーニングである。具体的には、教師の評価・採点に先立って学習者同士が互いの翻訳を批評・添削し合うピア・レスポンスやピア添削の手法を用いた。PVの翻訳でも、学習者はそれぞれの翻訳の草稿（以下、下訳と呼ぶ）を持ちより、2～3人のグループで話し合いながら、協働的に翻訳を完成させた。授業活動にピア・ラーニングを取り入れることの効果には、「学習者が自身の学習に責任を持つようになること」、「自律性を育むコミュニティづくりが教室を超えて可能になること」（ナズキアン, 2010）といったものがある。つまり、本コースで翻訳の基礎を学んだ学習者が、コース修了後にも自律的な訓練を続けていき、より専門的な翻訳ができるようになることを目指したのである。

第二の特色は、実務翻訳の三大要素である「読者・用途・効果」の概念（成田, 2011）の導入である。「読者」というのは、誰のためにその翻訳をするのかということである。どのような読者をターゲットに翻訳するかを意識した翻訳と、意識していない翻訳との間に大きな質の違いが見られることは想像に難くないであろうが、読者なしではそもそも翻訳自体に意義がないということは、意外に忘れられがちである。この翻訳理論と同様の指摘は日本語教育にもあり、佐藤・熊谷（2011）は、日本語学習者にとって、「自分の言いたいことを相手にわかってもらえるためにはどうしたらいいのか」といった「意思伝達・他者理解の能力を培う場を数多く経験することが、社会参加をめざす上でも重要である」と述べている。

「用途」というのは、その翻訳が何のために使われるのかということで、翻訳理論で言う Skopos Theory に通ずる考え方である。「効果」というのは、その訳文を読んだ読

者にどんな読者体験を与えるのか、読者をどんな気持ちにさせるのかということである。翻訳の依頼者は何らかの用途を以って翻訳を依頼し、その用途のために、訳文の読者に何らかの反応を期待する。換言すれば、実務翻訳における質の高い翻訳というのは、依頼者の望む効果を読者に体験させられる翻訳だと言うことができよう。原文に「読者・用途・効果」があるのと同様に、翻訳にも「読者・用途・効果」があり、たとえ同じ原文を翻訳するのであっても、読者が変われば用途も変わるし、用途が変われば、翻訳に求められる効果も変わる。従って、本コースでは、「読者・用途・効果」を意識化することによって翻訳技術が大きく向上するということを学習者に指導した。

PVプロジェクトでも、通常の翻訳授業と同じように、訳文の「読者・用途・効果」についてクラスで話し合う時間を設けた。PVの「読者」とは、一言で言うと、インターネットや国外の展示会を通して写真と「声」を鑑賞する英語話者である。さらに進んで、「読者」はアメリカ英語の話者に限定されず、また、英語の母語話者にも限定されないという点も見えてきた。このような話し合いの結果、学習者たちの中には、翻訳の際にアメリカ英語に特化した表現やスラングや、非母語話者には分かりにくい慣用句、難しい語彙などは使わないという合意が生まれた。

PVの「用途」は、作者の「声」——伝えたいこと——を誤解なく読者に伝えることである。作者が伝えたい本当の声は、言葉の表面上に表れた意味ではなく、その裏に潜んだ想いである。多くの「声」には、作者を取り巻く現状に対する批判的な態度が感情的に表れ、つらさや悲しさ、やり切れなさなどの想いが溢れている。学習者たちは、担当する「声」の訳文を協働的に推敲しながら、作者の想いという掴み難い、抽象的なものの本質を捉えようと努力した。PVの場合、「用途」と「効果」には重なる部分も多いのであるが、「効果」を訳すというのは、そのような作者の想い・メッセージが、英訳を読んだ人にも実感できるように訳すということである。「読者・用途・効果」の話し合いを通して、学習者たちは、字面に囚われず、作者が何を伝えたいのかを把握し、それが実感を伴って伝わるような英文を書くのを目指すという認識を共有した。²

5. フォトボイスと翻訳プロジェクトについて

2011年の立ち上げ以来、PVのミーティングは今も継続的に行われているので、新しい「声」は次々に生まれ続けている。それに伴い、本コースのPV翻訳プロジェクトも、2013年から毎年行っている。一年目の例で言うと、「声」は計75点程あり、授業二回をPVプロジェクトに充て、学習者一人当たり5~6点の「声」を下訳した。

翻訳プロジェクトに先立ち、PVプロジェクトの代表者である吉浜がクラスを訪れ、プロジェクトの概要や意義について学習者に説明し、訳文の「読者・用途・効果」について話し合った。この作業はPVプロジェクトへの学習者の動機づけとして機能したと言える。実際の翻訳作業は、次に述べるように、何重ものプロセスを経て、多くの時間をかけて、協働的に行った。

- 1) 課題(宿題)として、授業外で担当の「声」を下訳する。
- 2) 本コース指導教師(望月)が下訳にフィードバック(以下、FB)を与える。
- 3) 同じ撮影者の「声」を担当した学生でペアやグループを作り、教師のFBも参考にしながら、クラス内でお互いの翻訳を添削し合い、翻訳を完成させる。

²本稿では、日本語翻訳実習コースの概要について、PVに関係する部分に絞って紹介したが、より包括的な授業活動については、過去にPJPF(2013)やCAJLE(2014)で発表しているため、それらのProceedingsを参照されたし。

- 4) 吉浜と本コース指導教師と英語母語話者の学習者二名が授業外で集まり、全ての「声」を推敲し、最終稿を仕上げる。

PVの翻訳は、通常授業で扱う翻訳課題と比べ、特に難しかったようである。その理由の一つは、PVの翻訳は「効果」を訳すのが非常に難しい翻訳であったためだと考えられる。説明調の「声」も若干あるものの、主にPVには情緒的な文章が多く、原文の「声」を發した被災者の女性たちの心情——やりきれない思い、悲しみ、憤りなど——を効果的に翻訳に反映させなければならなかった。しかし、作者の心情を理解し、「効果」を意識した質の高い翻訳をするためには、学習者たちは被災地や避難の状況について深い知識を持っている必要があり、その知識を欠く学習者たちにとって、それはかなり難易度の高い課題であった。本コース指導教師では指導しきれない問題も多かったため、実際にPVのミーティングに立ち会っている吉浜が再びクラスを訪れ、問題となる写真の撮られた背景や状況を説明した。

PVの翻訳プロジェクトは、通常の課題翻訳よりもピア・ラーニングという側面の後押しができた³というだけでなく、教室で学んだことを社会・コミュニティに還元できたという点において、特に大きな意義があったと言える。PVの展示会は本学でも何度か開催され、翻訳を担当した学習者の名前をクレジットしたり、レセプションで労力を称えたりする機会もあった。地元の日本語新聞にも展示会の様子が取り上げられるなど、学習者たちは自らの言語活動が教室を越えて社会・コミュニティにつながったことに対して、深い達成感を得られたようである。言うまでもなく、国連防災世界会議を含む日本国外での展示会は、彼らの努力なしには実現し得なかったものである。PVの写真は、写真だけでも訴えかけるものは十分にあるが、訳文を読んだ展示会参加者からは、「やはり『声』（訳文）があることで、写真にまつわる背景などが理解でき、より感情移入することができた」という反応が見られた。

一方、上記4)の「声」の推敲過程で、一応完成したはずの訳文を大幅に改訂する必要があることも多く、全体的に学習者の翻訳の質が低いという問題点も見えてきた。言語的な理由としては、いわゆる教科書的ではない日本語の文章を読む機会が、上級の学習者ですら乏しかったということが挙げられる。教科書は当然であるが、映画やドラマ、小説など、学習者の目に触れやすいメディアは、詰まるところ、書くプロによって書かれたもので、正確で洗練された、読みやすい文章であると言えよう。この事実によりPVの翻訳に携わるまで気付かず、驚かされたことは、日本語教師として反省を促された。それに加え、PVの作者たちは東北出身者であったため、方言や、土地独特の言い回しや風習など、日本語の多様性という問題も学習者たちを悩ませた。

しかし、翻訳の質には、言語的なものだけでなく、非言語的な要因も深く関わっている。PVの翻訳に関しては、実際には、こちらの方が大きな問題であった。まず、初歩的な誤訳が生じるのは、本コースの学習者たちに、震災に関する社会文化的な知識が欠けているためであると考えられた。上記の通り、吉浜がクラスを訪れ、フォローアップをしたのであるが、二回の授業では、やはり限界があったようである。また、本学とPVの震災地とは地理的に離れているため、学習者にとって、PVが自分の属しているコミュニティとは言いがたく、「効果」を訳すのが大事な翻訳において、感情移入がしにくいという要因も考えられた。

この問題の解決策として、2015年夏、日本へのフィールド・トリップ（以下、FT）を企画し、翻訳コースの学習者が被災地を訪れ、「声」の作者と対話する場を設けた。

³ 通常の翻訳課題では、学習者は他の学習者の翻訳を分析し、建設的なFBしたり、気になる部分や明らかに誤っている部分を添削したりする。

実際に現地に赴くことによって、学習者は被災地の現実を肌で実感することができ、社会・コミュニティに関わっているというより強い意識を持つようになるのではないかと考えたのである。それがPVの翻訳へのより強い動機付けとなり、現地で得た社会文化的な知識にも裏打ちされ、PVの翻訳の質も上がるのではないかという狙いもあった。

2015年8月、翻訳実習コースの学習者二名と吉浜、そして本コース指導教師の四名で、PVが活動を行っている郡山、女川、石巻、仙台、宮古、東京の全六都市を巡った。各都市では、少なくとも4~5名、多くて10名以上のPVプロジェクト参加者の協力が得られ、細かい違いはあるものの、概ね次のような活動を行った。

- 1) 「声」の作者との対話
- 2) 新しい「声」の翻訳

「声」の作者との対話では、特にフォーマットは設けず、一人一人が語りたいことを語りたい順番で語り、学習者も適宜、質問をしたり、受けたりした。対話の内容は、震災時や震災後どのような経験をしたのか、「声」の写真はどんな気持ちで撮られたのか、などである。この対話を通じて、学習者は短い「声」には表しきれない深い心情について、より深く理解することができたと考えられる。質の高い翻訳に必要な震災地の社会文化的背景・知識は、あまりに最新すぎる情報や個人的な体験と結びつくものが多く、文献やインターネットを当たって調べるには限界があった。やはり、現地に赴き、当事者と対話をするのが、最も確実な方法であったと思わせられた。

新しい「声」というのは、下訳は終わっているが最終稿がないものや、下訳すら存在しない出来たばかりの「声」のことである。その翻訳作業は、公共スペースを貸し切り、スクリーンに写真と「声」を映し、それらを対話に参加した作者たちと一緒にしながら、協働的に行った(資料1)。教室では、吉浜に訊くことしかできなかった疑問が、この場では「声」の作者本人に訊くことができる。作者本人が感情的な理由で言葉に詰まり、説明を続けられなくなることもあったが、他の参加者が助け舟を出したり、分かる範囲で作者の心情を代弁してみたりするなど、「声」そのものの作成過程も髣髴とさせる雰囲気であったのが興味深かった。

上記の二つの活動に加え、学習者には、FT中に以下の四つの課題を与えた。

- 1) 毎日の体験を日記として記録する
- 2) 訪れた土地で写真を撮影し、自分自身のPVを作る
- 3) FTを振り返って、レポートを書く
- 4) 以上をポートフォリオにまとめる

学習者のPVの例は資料2に添付した。翻訳実習コースの課題であることを考慮し、学習者は自発的に「声」の英訳をつけたが、これは教師側としては想起していなかったものである。

本FTの最も大きな成果は、自分の訳文が作者の意図した「効果」を正しく伝えられているかどうか、学習者が作者自身に確認しながら翻訳することができたことである。また、作者たちと対話することによって、過去に翻訳したものをより質の高い訳に改訂することもできた。作者からのインプットに基づいて、翻訳を吟味・分析し、改訂する作業によって、学習者が「読者・用途・効果」への意識づけをより強いものとし、その重要性もより理解できるようになったことも成果の一つである。これらは、日本とアメリカの地理的・時間的な隔たりを考えると、教室内ではほぼ不可能な活動であったと言える。

学習者自身は、FTを振り返って、次のように述べている。

「(東北の)自然災害の影響に関する理解を深めることができ、感情的な言葉を翻訳するという課題にも挑戦でき、日本で過ごした9日間は価値のあるものでした。

(PVプロジェクトの)女性たちと話し、その経験について直に聞くことができたのは、どんなニュース記事を読むのよりも遥かに迫力を感じました。…」この言葉には、当初の狙いであった、震災や被災地に関する社会文化的な知識の獲得と、社会・コミュニティに関わっているという意識への言及も見られ、本FTが相応の成功を収めたことを示している。

以上をまとめると、本FTは次のような成果を上げたと言える。

- 1) 原文の作者と翻訳者との直接的なコミュニケーション
- 2) 震災にまつわる社会文化的な背景知識の獲得
- 3) 「読者・用途・効果」への意識づけの強化
- 4) PV参加者というコミュニティとの心理的つながり
- 5) PVプロジェクトの翻訳への強い動機付け
- 6) PV翻訳の質の向上

究極的には、6)が翻訳技術全般の向上につながればよいと考えているが、PVの翻訳は普段の実務翻訳とはスタイルが異なるため、直接的な影響は確認できない。翻訳に必要な日本語能力を伸ばすという点に関しては、短期間のFT中に日本語能力が劇的に向上したとは当然言えない。しかし、北米で生活している時より日常的に日本語に触れることができたこと、特に、普段接触のないタイプの日本語（東北地方、世代の違い、専門用語）に触れられたのが学習者にとって貴重な体験であったことは、容易に推察される。

本FTの予期せぬ副産物は、参加した学習者だけでなく、「声」の作者たちの意識にも好影響を与えたことである。作者たちにとって、自分たちの「声」の訳文は、気づけば海外から完成稿が送られてきているもので、自分の物であり、自分の物でないという、曖昧なつながりしか感じられないものであったかも知れない。しかし、実際の翻訳作業に参加することによって、それまで漠然と感じるだけであった自分たちと翻訳者の間のつながりをより強固に感じるだけでなく、そこから先の世界と自分たちの「声」とのつながりを改めて実感することができたのである。また、過去にそうであったように、新しい「声」の翻訳中にも、ほんの短い一つのフレーズに長時間悩むことがあり、それは「声」の作者たちに翻訳の難しさというものを気づかせるきっかけとなった。その気づきを通して、作者たちは、自分たちの心情を分かってもらうにはどのように伝えればいいのか、より効果的な「声」の表現方法ということに意識的になったと考えられる。これは、学習者の言語活動がコミュニティに影響を与えた良い例として、本FTが社会・コミュニティにつながる日本語教育を实践できたことを示唆している。

6. おわりに

日本語翻訳実習コースを立ち上げた時に教師の念頭にあったのは、翻訳という実務的な技術を学ぶのだから、学習者には、教室の中だけに留まるのではなく、外の世界にも出て行って、学んだ翻訳の技術を活かしてもらいたいというものであった。PVプロジェクトへの協力参加も、そのような動機に裏付けられている。しかし、数年にわたるPVプロジェクトの翻訳や被災地へのFTは、予想以上の大きな収穫をもたらしてくれた。当初、PVプロジェクトの翻訳は一回きりの参加の心づもりで、このように壮大なプロジェクトになるとは想像もしなかった。「声」の作者は翻訳のクライアントであり、学習者はその依頼を受けただけであるというように、教師自身とPVの間には隔たりがあったように思う。東北地方は訪れたことがなかったし、親戚や知り合いもいなかったことも影響していたのであろう。また、「声」に声高に表現された主義・主張にどうしても共感できない作者が一人いて、会ったこともないその人物に否定的な感情を持ったりもした。しかし、六都市を訪れて、PVプロジェクト参加者を含む多くの被災者たちと出

会い、交流することによって、作者と「声」との深いつながりを再認識すると共に、自分自身と「声」とのつながりを初めて実感することができた。学習者に期待していた意識の変化は、奇しくもコース指導教師の中に起き、それ以来、PVを身近に感じることができ、より真摯にプロジェクトと関わることができるようになったのである。また、この経験は、日本語翻訳実習コースのあり方、さらには自らの日本語教育のあり方までも振り返る機会を与えてくれた。

今後の課題は、まだ一度しか実現していない本FTを、今後も継続して行うことである。最大の問題は資金であるが、大学の財政的支援などを有効に活用し、PVの作者たちと本コースの学習者たちとの間により確かな絆を構築していきたい。また、翻訳という外国語学習の手法が社会・コミュニティとつながりやすいことを活かし、翻訳を通じた様々なコミュニティとのつながり方、社会への貢献の仕方を学習者に奨励していきたい。例えば、本学にはLanguage Resource Centerという機関があり、Language Bankと呼ばれる翻訳サービスを提供している。翻訳を担う学生ボランティアたちには、各国語の翻訳の依頼を知らせるメールが常に届いている。本コース履修者には積極的にそのボランティアに関わるように奨励し、実際に翻訳をしている学習者も少なくないが、今後は、Language Bankをコース内容に組み込んでみてもいい。本コースの期末プロジェクトは、学習者が自分で企画した翻訳プロジェクトを行っているが、PVのFT後は、そこに「社会・コミュニティとつながる」という要素を入れた。今後は、学習者の訳文がどのようにコミュニティに貢献することができたか、その成果までを含めて報告させたら、より意義のあるプロジェクトになるであろう。

翻訳は孤独な作業と思われがちであるが、実際には多数の人間が関わっている。まず、原文の作者がいて、原文の読者、翻訳者、そして、訳文の読者がいる。職業としての翻訳には、これに翻訳の依頼者も関わってくるであろう。他の言語活動と何ら変わることなく、翻訳も異なるアイデンティティ間のコミュニケーションだと言える。PVプロジェクトとFTを通して、学習者は日本語を使って、様々な方向に様々な形態で社会・コミュニティとつながり、影響を与え合うことができた。まず、被災者の生の声に触れることによって、原文の向こう側にあって可視化されなかった被災地の現実を実感することができた。その体験は、学習者のコミュニティへの関わりを意識化させ、翻訳への強い動機付けとなり、翻訳の質を向上させた。そして、その訳文はインターネットや展示会を通して、「声」の作者や学習者も想像もしないような様々なコミュニティへと開かれていく。インターネット技術が普及している限り、その広がりを地域的だけでなく、時間的にも広がっていくであろう。翻訳という教室活動は、文法訳読法の印象が強すぎるせいか、外国語教育において過去の遺物であるかのように見なされがちである。しかし、本稿で示せたように、翻訳はコミュニティとつながり、社会に貢献するのに適した言語活動であり、複言語・複文化能力の育成にもつながるグローバル時代の言語教育であることを強調し、本稿を結ぶ。

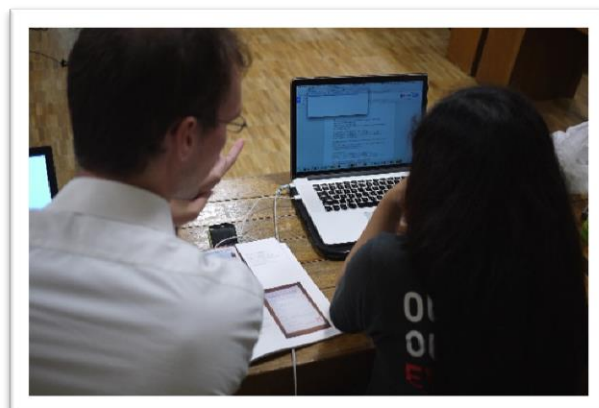
参考文献

- 澤恩嬉・渡辺文生 (2014) 「初級日本語学習者のための『つながり』を目的とした遠隔授業の実践」『日本語教育方法研究会誌』21(1), 56-57
- 佐藤慎司 (2014) 「ことばの教育をめざすものは何か：社会・コミュニティ参加をめざすことばの教育」『国語教育思想研究』8, 58-63 国語教育思想研究会
- 佐藤慎司 (2015) 「社会・コミュニティ参加をめざすことばの教育とメトロリンガル・アプローチ：複言語・複文化主義をこえて」『リテラシーズ』16, 1-11 くろしお出版
- 佐藤慎司・熊谷由理 (2011) 『社会参加をめざす日本語教育』ひつじ書房
- 佐藤慎司・熊谷由理 (2012) 「社会参加をめざす日本語教育：理論とその実践」
Proceedings of 19th Princeton Japanese Pedagogy Forum, 92-100.
- 柴田智子・佐藤慎司 (2016) 「コミュニティ参加型プロジェクト：多読クラブ運営に携わった学生のケースを中心に」Proceedings of the 26th Central Association of Teachers of Japanese, 196-202. Japanese Language Program, University of Michigan.
- 當作靖彦 (2013) 『NIPPON3.0の処方箋』講談社
- 當作靖彦・中野佳代子 (2012) 『外国語学習のめやす 2012』ココ出版
- 特定非営利活動法人 フォトボイス・プロジェクト ウェブサイト：
<http://photovoice.jp/about/>
- ナズキアン富美子 (2010) 「ピアラーニングとアセスメント」佐藤慎司・熊谷由理 (編) 『アセスメントと日本語教育：新しい評価の理論と実践』69-96 くろしお出版
- 成田あゆみ (2011) 「ライバルに差を付けよう！プロに近づくための翻訳テクニック 産業翻訳編」『翻訳・通訳ジャーナル』Autumn 2011号 38-39 アルク
- 望月良浩 (2013) 「学習者主体の翻訳実習コース：自律的な学習者の育成を目指して」
Proceedings of the 20th Princeton Japanese Pedagogy Forum, 235-250.
- 望月良浩 (2014) 「翻訳の評価に関する理論と実践：日本語翻訳実習コースの現場から」
Proceedings of the Canadian Association for Japanese Language Education Annual Conference, 74-84.
- 吉浜美恵子 (2012/2013) 展示会用フォトボイス紹介文
- Hasegawa, Yoko (2005). Designing a Translation Course for Japanese Majors. IJeT16 Chicago Proceedings, 80-84.
- Hasegawa, Yoko (2012). The Routledge Course in Japanese Translation. London and New York: Routledge.
- Yoshihama, Mieko (2014). PhotoVoice: Collective, Participatory Community Assessments and Advocacy Following the Great East Japan Disasters. Presentation at American Public Health Association 142nd Annual Meeting and Expo.

資料1：仙台でのミーティングの様子



(奥：吉浜；手前：望月)



(左：学習者 A；右：学習者 B)

資料2：学習者 B が撮影した写真と「声」



放射線モニタリング

郡山駅西口前のモニタリングポスト。福島第一原発に関するニュースはフォローしてきたが、このモニタリングポストを実際に自分の目で見ることで、未だに放射線・第一原発が、地域の住民の生活をいかに影響しているか実感した。

Monitoring Radioactivity Levels

There is a radioactivity level monitor right outside the west entrance of the Koriyama Station that indicates current levels of radiation.

While I have been following the news regarding the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant, seeing this finally made me realize that it is still very much a problem affecting people's lives.